

## 『哲学の探求』第二十三号刊行にあたって

ここに上梓するのは、第二十三回全国若手哲学研究者ゼミナール（通称「若手ゼミ」）に於いて行なわれた研究報告を纏めたものである。今年度の若手ゼミは、会場を昨年の下田から東京近郊の逗子・松汀園に移し、七月十五、十六の二日に亘って開催された。喜ばしいことに、今年はわれわれの熱心な勧誘活動が功を奏したゆえか？ 充実した企画のゆえか？ はたまた東京近郊という便の良さゆえか？ 延べ五十名に及ぼんとする参加者、殊に多くの新参加者を得ることが出来た。この点、若手ゼミの将来に明るい希望の光が射すのを見る思いである。

とは言え、依然われわれが幾つかの問題を抱えていることもまた事実である。「全国」と呼称しながら、近年、関東圏以外からの参加者が減少化傾向にある事態を看過するわけにはいかない。さらに、発足以来続けてきた本誌の刊行は、売れない／売らないという全般的な状況の下、今や発刊そのものが危ぶまれてさえいるのである。そこで、われわれは今一度、一切の権威とマンネリズムを排すという若手ゼミ発足以来の理念に立ち戻るとともに、個々の参加者の自主的な行動により今後の若手ゼミが形づくられてゆくとの認識を新たにする必要がある。若手ゼミは楽しい。夜中の酒盛りも、大風呂敷有り袋だたき有りの自由な議論も。この、不定形でユニークな哲学的活動を、あるいはその成果である本誌を、哲学に関心をもつ若手研究者等に広く紹介しよう。人に関してであれ、学問に関してであれ、新たな出会いは若手ゼミを一層活性化し、そこに集う参加者一人一人にとって若手ゼミをますます刺激的なものとするはずである。

今年で二十三年目を迎える当ゼミの存在が、ゼミの雰囲気や伝えもするであろう力作揃いの本誌を通じ、ゼミの存在を未だ知らぬ全国の多くの研究者に知られることを、そしてゼミを通じ、われわれの交流の場が少しでも広がることを心から願って止まない。

一九九五年 秋

## 第二十三回全国若手哲学研究者ゼミナール 世話人一同

代表 美頭 千不美